

立花宗茂

1567
S
1642

九州を代表する猛将の二人を父にもつサラブレッド

大友家を支えた勇将である高橋紹運を父にもつ立花宗茂は、1567年に豊後国国東郡寛(現在の大分県豊後高田市)に生まれる。独眼竜伊達政宗や日本一の兵(ひのもと)のつわものと呼ばれた真田信繁と同年。

雷神と呼ばれた戸次道雪の娘である闇千代の婿となって、立花家の家督を継ぐこととなる。その時わずか数え15歳の少年であった。実父高橋紹運からは、「万一敵同士になったら自分を討て」という言葉とともに剣長光を譲り受けた。

豊臣秀吉に称えられるほど戦上手な武将

島津軍に立花山城を包囲されるも、徹底抗戦を行う。実父高橋紹運の守る岩屋城の戦いで疲弊する島津軍は、豊臣軍九州入りの報を受けて撤退。その隙を見逃さず、島津軍へ攻勢を仕掛け、高島居城を攻め落とし、岩屋城や宝満城を奪回する。

その後、豊臣秀吉に島津攻めの先鋒を命じられそこでも活躍すると、その功が認められ筑後柳川に13万石を与えられ、柳川城主となった。この時、秀吉に「剛勇鎮西一」「東の本多忠勝、西の立花宗茂」などと評されたと言われている。

壮絶な戦いによる実父との別れ

薩摩(現在の鹿児島県)の島津軍約4万の大軍が九州統一を目指し北上。立花宗茂が守る立花山城への侵攻を防ぐため、高橋紹運率いる700余名の兵士が岩屋城で戦う。「岩屋城の戦い」と呼ばれ、落城まで戦い抜き全員戦死した。島津軍も多数の兵士を失ったため、態勢を整えるのに時間を要し、九州統一の失敗の遠因となった。

「義」に生き、家臣や他の武将にも愛された

関ヶ原の戦いでは、家臣から東軍に加わるように進言もあっていたが、損得勘定で動かず、豊臣秀吉への恩義から西軍に属し、結果敗軍の将となった。敗戦後、柳川へ戻る道中に父高橋紹運の仇である島津軍と遭遇。この時、同じ西軍で壮絶な戦いにより満身創痍となっていた島津軍に対し、仇討ちを進言する家臣に「敗軍を討つことなど武士のやることではない」と一喝し、仇を討つことはせず護衛を申し出た。島津義弘は感謝の念を忘れず、立花宗茂との親交は続いた。

改易され柳川の地を去り、徳川家に取り立ててもらうため江戸に行き、浪人生活となるが、家臣たちは立花宗茂を慕い、手弁当で支え続けた。さらに、交流のある大名・寺院・商人たちからの支援が、復活への足がかりとなった。

奇跡の復活を遂げた唯一の武将

徳川家への謁見により、その人望・武勇・功績が認められ、二代将軍徳川秀忠から奥州棚倉(現在の福島県棚倉町)を与えられ、大名として復帰。その後、秀忠の軍師参謀的な役割として大阪冬・夏の陣などで活躍し、1620年(元和6年)、ついに20年の時を経て旧領・筑後柳川に再封される。

関ヶ原の戦いにて敗れ、改易された大名の中で唯一の旧領復帰を果たす。まさに「復活の大名」。

最後まで戦いに出陣し、「武神再来」と畏れられた

三代将軍徳川家光となっても引き続き近侍し重用されていた宗茂は、島原の乱へ出陣の命が下る。その時72歳であった。実戦経験豊富な宗茂の活躍により島原の乱は鎮圧。諸大名から「武神再来」と畏れられた。

1642年(寛永19年)11月、江戸にて76歳の生涯を終える。

復活の大名



立花宗茂、76年の生涯

- 1567年 高橋紹運の長男として豊後国国東郡筥において誕生、幼名千熊丸。
- 1569年 紹運、高橋家を継ぎ、宗茂も筑前国御笠郡岩屋城に移る。
- 1581年 8月、道雪の養嗣子となる。
11月、道雪・紹運、秋月勢と筑前国穂波郡潤野原に戦う。このころ道雪は筑後各地を転戦、宗茂は筑前立花城の留守を護る。
- 1582年 11月、立花城にて名字を「戸次」から「立花」に改める。
- 1586年 7月27日、岩屋城落城、紹運戦死。
8月6日、宝満城落城、直次・実母宗雲尼は島津方に捕らえられる。その後、島津勢は宗茂の立花城を包囲。
8月24・25日、島津勢撤兵のすきに、島津方の糟屋郡高島居城を攻め落とす。
- 1587年 4月5日、筑前秋月の陣で豊臣秀吉に島津攻めの先鋒を命じられる。
5月26日、薩摩からの帰途、薦野賢賀に立花の名字を許す。
6月25日、筑後三郡を与えられ、山門郡柳川を城地と定める。
- 1592年 - 1595年 文禄の役に出陣。
- 1597年 - 1598年 慶長の役に出陣。
- 1600年 7月、関ヶ原の合戦で西軍に加担。
9月3日、近江大津城主京極高次が東軍に転じたため大津城を包囲。
9月15日、京極高次降伏、関ヶ原には参陣できず。関ヶ原の敗報に接し大坂籠城を説くが、いれられず柳川へ戻る。
9月26日、帰路安芸国日向泊りで島津義弘と面談。
10月2日までに柳川へ帰城。
- 1601年 筑後は田中吉政へ与えられ、宗茂は改易される。肥後高瀬に寓居。
7月、上方に上り家康に拝謁、上方滞在。
10月24日、中江新八から日置流弓術免許。
- 1606年 9月、江戸へ出て将軍秀忠に拝謁。
その後、奥州棚倉(南郷)に領知を与えられる。
- 1614年 直次とともに大坂冬の陣に従う。
- 1615年 大坂夏の陣に従う。
- 1620年 11月27日、田中家の改易に伴い、筑後柳川への再封決定。
- 1637年 10月、天草・島原の乱勃発。
忠茂、原城に着陣。立花勢が主力となり原城三の丸を攻撃。
- 1642年 7月ころより死の床に臥す。
11月25日、没。江戸下谷広徳寺に葬られる。享年76。

戦国時代でも稀な女城主

九州北部を中心に勢力を誇った名門大友家の重臣にして、「雷神」「鬼道雪」と呼ばれた猛将戸次道雪を父にもつ闇千代は、1569年（永禄12年）、筑後国に生まれる。道雪から武術を教え込まれ、闇千代も相当の達人といわれていた。

わずか7歳にして道雪より家督を譲り受け、立花山城主の座を継承。日本史上、城主になったことを一次史料で確認できる唯一の女性といわれている。

その後、立花宗茂と結婚し正室に。ときにぶつかり合いながらも信頼関係を築いてゆく。

豊臣秀吉も恐れぬ度胸

立花宗茂が文禄・慶長の役の出陣中、佐賀の名護屋城に滞在していた豊臣秀吉から呼びつけられた闇千代は、女中に鉄砲を構えさせて護衛をさせ、自らも武装して名護屋城に乗り込んだ。さすがの秀吉も何もできなかったという逸話が残る。

名将の進軍ルートを変更させるほどの圧力

関ヶ原の戦いの後、加藤清正が降伏勧告のため柳川へ進軍した際には、闇千代が指揮し臨戦態勢であった軍との衝突を避けるため、進軍ルートを変更したとの伝説が残る。

立花宗茂との別れ

関ヶ原の戦いにより立花宗茂が改易されると、朝鮮出兵時に立花宗茂に命を救われた加藤清正に庇護され、腹赤村（現在の熊本県玉名郡）で暮らす。立花宗茂の旧領復旧を信じ待ち続けるも、病に臥せ 34 歳で死去。



聞 千 代

き
ん

ち

よ

1569
S
1602

聞千代、34年の生涯

- 1569年 戸次鑑連(道雪)の娘として、筑後国問本城(福岡県久留米市)に生まれる。
- 1571年 父・鑑連が主である大友宗麟より立花山城(福岡県糟屋郡新宮町、久山町、福岡市東区)の城督を任じられる。
- 1575年 7歳のとき、父・道雪から立花山城の城督、城領、諸道具など一切を譲られる。
- 1581年 13歳のとき、2歳年上の宗茂と結婚、翌年から夫・宗茂が立花姓を名乗る。
- 1587年 夫・宗茂が筑後国13万石の大名となり、柳川城(福岡県柳川市)に移り住む。
- 1600年 夫・宗茂が関ヶ原の戦いで西軍について負けたため、柳川城を明けわたす。宗茂は肥後国高瀬(熊本県玉名市)に、聞千代は腹赤村(熊本県玉名郡長洲町)に移り住む。
- 1602年 前年に夫・宗茂は浪人のまま江戸に移る。聞千代は腹赤村に残り、この地で没する。享年34。

人物相関図

～ 宗茂と聞千代を取り巻く人物たち ～

